

遼東先史遺跡発掘報告書刊行会編

『文家屯 一九四二年遼東先史遺跡

発掘調査報告書』

遼東半島をはじめとする中国東北地方南部では、日本統治下にあつた時代、日本人考古学者を主体とする発掘調査が数多く実施された。そのうち、東亜考古学会による調査成果は、戦前に『東方考古学叢刊』として公刊され、現在においても基礎資料としての役割を十分に果たしている。一方、日本学術振興会が組織した、梅原末治氏を首班とする一連の調査は、黒陶系文化の東方波及の様相解明などを目的とするもので、新石器時代に関する重要な成果が多く含まれているにもかかわらず、概要が紹介されるにとどまり、正式な報告が待ち望まれていた。

ここに紹介する報告書所収の文家屯・東大山積石塚・大頂山の各遺跡調査も、その一部である。遺跡は大連市郊外に所在し、一九四二年九月―一〇月にかけて、当時京大の院生であつた澄田正一氏、東大講師の

八幡一郎氏ら四名が現地調査にあたつた。立地と歴史的環境（第1章）、調査の経緯（第2章）は、これら当時の関係者の記述と、岡村秀典氏による研究の現状に照らした解説より成る。日付順に忠実に再録された八幡・澄田両氏の調査日誌は、内容の詳細さから当時の発掘状況が彷彿とされ、記録としての価値も高い。

本書の主体を占めるのは文家屯遺跡の発掘報告である（第3章）。遺跡と遺構は澄田氏の記述に基づいてまとめられ、出土遺物は今回再整理された。土器・土製品は松野元宏氏、石器と骨・牙・貝製品は土屋みづほ氏が担当している。それぞれ弥生時代の土器と石器の研究を志す新進の二人に、弥生文化の源流として、日本の研究水準に照らした資料整理が託されたという。両氏は見事にこの要求に応えていると言つて良い。土器については、小破片も含めて総数六〇〇五点が呈示され、その類型や変遷が検討されている。とくに、筒形罐における文様帯の分割という施文原理の変化を読みとることで、A区の層位別資料に時期差を認め、郭家村下層期―同上層期にわたる遺跡存続期間を明らかにしたことは、重要な成

果といえる。石器については、未製品を含め五一点が示された磨製石鏃の存在が目玉を引く。朝鮮半島―九州にみられるものとの関係が気になるところである。また、石庖丁や磨製石斧、石錘など生業復元に重要な資料ももれなく報告され、精密な実測図とともに、今後基礎資料として活用されよう。

東大山積石塚（第4章）と大頂山遺跡（第5章）は、文家屯の北―西方山上にある遺跡で、並行して踏査され、一部が発掘された。おもに岡村氏が、当時の記録をもとに再整理をしている。東大山は、累々と築かれた積石墳墓群のひとつで、三基の石室から、郭家村上層期の遺物が出土している。遼東半島における積石塚の多様で複雑な展開過程を検討する上で、貴重な資料となる。文家屯の居住集団の墓地とも評価されるので、集落と墓域の関係を追究可能な成果としても興味深い。一方大頂山では、標高一五七メートルの山頂付近で文化層が確認され、多数の遺物が採集されている。文家屯や東大山より一時期下る双砬子期の集落と想定され、その特異な立地が今後関心を呼ぶであろう。

自然科学的分析（第6章）には、中国社

会科学院の袁靖氏による動物遺存体の鑑定と、宇田津徹朗・藤原宏志氏による土器胎土のプラント・オパール分析がある。貝塚遺跡である文家屯では、貝類のほか多くの動物骨が採取されていた。遼東半島の先史遺跡でこれらに関するデータはいまだ少なく貴重である。トラフグの比率の高さが山東半島と共通の特徴と指摘され、また若年イノシシの比率の高さが、家畜化との関連で注意されている。プラント・オパール分析では、文家屯A区第3層出土紅焼土の一点からイネが検出され、紀元前四千年紀にさかのぼり遼東半島でイネが存在したことを示す結果として非常に注目される。現状では稲作の伝播までを決定づけるには至らないけれども、縄文後期以前にさかのぼるイネ情報が見えられつつある日本列島にとっても、経路を論ずる上で無視できないデータとなろう。いずれも、周辺遺跡での情報蓄積が待たれる。

考察（第7章）では、各遺跡の年代や性格を中心に、簡潔な考察を加えながらまとめられている。年代では、文家屯での層位別の土器様相の変化に加えて、C14年代測定結果と、山東からの搬入土器の様相から、

他遺跡との並行関係や広域編年上での位置づけが確認されている。第3層が大汶口文化中期、第2層が同後期から龍山文化に併行し、後者は紀元前三〇〇〇年紀後半ごろとなるようだ。性格では、文家屯遺跡について、想定される玉石器生産や狩猟・漁猟・農耕のありようを述べ、大頂山遺跡については、弥生時代の高地性集落を想起し注意を促している。また東大山積石塚については、その構造や副葬品からうかがえる社会構造や集団間関係に言及している。なお、末尾にこの考察をもとにした中文と英文の要旨が付される。

以上は、調査後六十年を経ているにもかかわらず、精細で美しい挿図や写真ともども見やすく簡潔に仕上げられ、日本における中国考古学研究と報告書作成の双方の水準を存分に発揮した優れた報告書となっている。資料呈示の方法やその考え方について、中国側研究者との間にはなお微妙な相違があるように思われるが、その溝を埋めていくことにも、つながるだろう。

本書の刊行は、最終的に澄田氏の仕事を継承し、科学研究費の交付を受けて刊行の体制を組織した岡村氏と、そのもとで遺物

整理の実務を担った松野・土屋両氏の労を最も多とするものである。しかし加えて、一九九六年に道半ばで他界された澄田氏の志が、原点にあることも忘れてはならないだろう。調査後に資料は京大文学部に運ばれたものの、敗戦の混乱や氏の異動と逝去により整理作業の中断や流転を重ねた経緯を知るとき、散逸させることなく資料を守り、刊行に向けた作業も進めていた氏とその門下の研究者の方々には、おおいに敬意を表したい。

若き発掘者のすぐれた問題意識と記録は、その熱意により世代を越えて継承され、いま高水準の報告書として結実した。報告書の作成は、発掘に携わる者の義務であり、今後も、対象とする時代や地域にかかわらず同種の作業は実施されていくであろうが、その点でも、参考とすべき点が多い。中国先史考古学の研究者のみならず、たくさんの人々が手にされることを願うものである。（B5版 二二五頁 写真図版二四頁）

二〇二〇年三月 真陽社 四七五〇円
（伊藤淳史 京都大学埋蔵文化財研究センター 助手）